

## シャー・ナワーズ・ハーンのアブル・ファズル伝について

近 藤 治

## はじめに

本誌第70号に、私はシャイフ・ファリード・バッカリーの著した『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』中のアブル・ファズルに関する伝記を全訳して紹介した〔近藤 2009A〕。このアブル・ファズル伝の冒頭部には、ホージャ・ニザームッディーン・アフマドの『タバカーティ・アクバリー』のなかのアブル・ファズルに関する簡潔な記述がほぼそのまま引かれて援用されているため、これと対照するために参考として『タバカーティ・アクバリー』のこの部分の全文も併せて紹介した〔近藤 2009A: 108〕。

『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』はアブル・ファズル没後49年を閲した1651年に成ったもので、553人の著名人たちの事蹟録を収めたものであった。一方『マアーシルル・ウマラー』(*Ma'āṣir al-Umarā'*)の方は、これよりもさらに130年ほどを経た1780年ごろに成ったもので、アクバル時代以来の731人にのぼる各界の著名人たちの事蹟録を収めている。両者の叙述スタイルを見てみると、相似た形を取っていることが分かる。

『マアーシルル・ウマラー』の著者シャー・ナワーズ・ハーン(Shāh Nawāz Khān)は、アクバル時代にその祖先がインドに来住し、アウラングゼーブ時代に祖父がラホール州とムルターン州の財務長官(*diwān*)を務めた名家に属していた。ムガル朝から分立したハイダラーバードのニザーム政権のもとに身を寄せていた彼自身も、ベラル地方とアフマドナガル地方の財務長官を務めた。卒年は1758年であった。彼の著作に係るものには『マアーシルル・ウマラー』の他に、詩人伝『バハーリストアーニ・スフーン』(*Bahāristān-i sukhūn*)や往古の書簡拾遺集『ムンシャアート』(*Munsha'āt*)、自らの書簡集『マカーティーブ』(*Makātib*)があるが、主著はいうまでもなく『マアーシルル・ウマラー』である。この書は、著者の死後その息子アブドゥル・ハッイ('Abd al-Hayy)が散佚を防ぎ増補を加えて完成させたので、父子両者の共著とされることが多い〔Marshall 1967: 8-9, 438-439〕。

貴顕功業録とでもいうべきこの書の刊本は、19世紀末にカルカッタのベンガル・アジア協会から3巻本として刊行された<sup>1)</sup>。この書の英語版は、『アクバル・ナーマ』の翻訳者として著名なヘンリー・ベヴァリッジによって1906年に着手されたが、彼は第1巻の刊行を

1) 'Abdur Raḥīm and Mirzā Ashraf 'Alī (eds.), *Ma'āṣir al-Umarā'*, 3 vols., Calcutta, 1888-1896.

目にしないまま 1929 年に他界した。その後を継いだペーニ・プラシャドが第 3 巻相当の浩瀚な索引部を完成させたのは、ベヴァリッジの着手以来 60 年近い歳月を経た後のことであつた [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964]。

プラシャドが英語版第 1 巻に寄せた序文によると、著者のシャー・ナワーズ・ハーンは 1747 年ごろに『マアーシルル・ウマラー』の第 1 次草稿とでもいうべき原稿を書き上げていた。しかし著者が 1758 年の政争に巻き込まれた際にその原稿はいったん紛失、翌年不完全な形で発見された。これを著者の親友ミール・グラーム・アリー・アーザード (Mīr Ghulām ‘Alī Āzād) が整理し、著者の息子アブドゥル・ハッイがさらにその増補作業をヒジュラ暦 1182 年 (1768/1769) から始め、1780 年に完成させた、ということである<sup>2)</sup>。テクストの写本はカルカッタのベンガル・アジア協会、パトナの Oriental Public Library、ハイダラーバードの Āsafiyah Library、ロンドンの大英図書館、旧インド省図書館、王立アジア協会、パリの国立図書館などに所蔵されているようであるが、今は 3 巻本の刊本に拠るしか術がない。アブル・ファズル伝はその第 2 巻 (1890 年刊) の 608-622 ページに収められている。また英語版では第 1 巻の 117-128 ページに収められている。

本稿では上記ペルシア語刊本を底本として、アブル・ファズル伝を全訳して紹介することにする。そして英語版も適宜参照しながらこの作業を行なうこととした。参照上の便宜のため、底本のページ数を訳文の当該ページ冒頭部にゴチック体で記入した。原文のパラグラフはこれを尊重することとし、その上で、長過ぎるパラグラフは適当なところでさらに改行することにした。皇帝の諡号が使用されているところは、例えば ‘Arsh Āshiyānī はアクバル帝と訳さず、単にアクバルと訳すことにした。カッコ類の使用法としては、前稿と同様、原語の表記や簡単な説明、言い換えはパーレン ( ) 内に記し、原文にない補足語はキッコー [ ] 内に記すこととした。また注記も訳文の理解に必要な範囲に止めた。

なお、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活躍したデリー生まれ、ラホール在住の優れた文人ムハンマド・フサイン・アーザード (Muḥammad Ḥusain Āzād) がウルドゥー語で著した大著『ダルバール・アクバリー』(Darbār-e Akbarī アクバル宮廷) には、アブル・ファズルの見事な伝記が収められている。私は最近、この部分を「アーザードのアブル・ファズル伝について」と題して『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第 5 号～第 8 号 (2009-2012 年) に 4 回に分けて全訳、紹介した [近藤 2009B; 2010; 2011; 2012]。併せて参照していただくと幸いである。

### (608) 偉大な碩学シャイフ・アブル・ファズル伝

彼はシャイフ・ムバーラク・ナーゴリー (Shaikh Mubārak Nāgorī) の 2 番目の息子で

2) Bains Prashad, Preface to *The Maāthir-ul-Umarā*, Vol. I, pp. v-viii.

ある。958年(1551)の生まれで、天性の利発さと呑み込みの素速さ、並びに知恵の卓越ぶりと弁舌のさわやかさでもって、短期日のうちに並ぶ者がいなくなった。彼は15歳までに哲学諸派と伝承的諸学芸を修得した。

伝えられるところによると、彼がまだ20歳になっていない駆け出しの教師のころ、イスファーハーニー (Iṣfāhānī)<sup>3)</sup>の注解書(hāshiya)が彼の眼に止まった。(609)その書は半分以上が白蟻(dimak)に喰われて、使い物にならないものであった。彼は虫喰い部分を取り除き、そこに白紙を貼り足した。そしてしばし熟考を重ねた後、それぞれの行のことは想定し、その草稿を程よく白紙の上書き上げた。その後、件の注解書の写本が入手された際にこれと比べてみると、2,3箇所別同義語(murādif)が用いられ、3,4箇所同類語(mutaqārib)が引かれていた。誰も彼も驚き入った。

アブル・ファズルは気質に隠遁癖があつて、友を避けるところが顕著であつた。そのため彼は人間関係の煩しさから逃れ隠棲して生きることを望んでいた。彼はあれこれの収入を求めようとはしなかつた。

アクバルが治世第19年(1574年3月11日—1575年3月10日)に東方諸地域に攻撃を加えることを計画していた折に、アブル・ファズルは友人たちの勧めで宮殿を訪れ、用意してきた玉座の節(クルアーン第2章第255節)に関する解説を提出した。そして皇帝がファトプル(Fatḥpūr ファテプル・シークリー)に帰還した後に、アブル・ファズルは2度目の謁見を賜った。彼の才能と学識についての名声が再三皇帝の耳に届いたので、皇帝の制限のない恩寵を受けることとなった。偏狭なウラマーたちからアクバルの気分が離れていったとき、傑出した知識と才能を備え、かつまた気質論(mizāj-shināsī)と勤仕法を心得ていた[ファイジーとアブル・ファズルの]2兄弟は、公式の知識と学問によって帝国の支柱となっていたシャイフ・アブドゥンナビー(Shaikh 'Abd al-Nabi)とマフドゥームル・ムルク(Makhdūm al-Mulk)とに対して繰り返し勇猛果敢に論争を挑み、皇帝の暖かい支援を受けながら彼らを完膚なきまでに沈黙させたので、宮中において(610)皇帝の信任は日一日と顕著になった。

アブル・ファズルは自分の兄シャイフ・ファイジーに比して一層完璧に皇帝の気質に合致していたので、将官(imārat)となって登朝した。治世第30年(1585年3月11日—1586年3月10日)に彼は官位一千位の榮譽をかち得た。また彼の母が死去した治世第34年に、アクバルは彼の家を訪ねて次のような哀悼と慰藉の意を表した。「もしこの世の人々が永存

3) ベヴァリッジは英語版の注記において、この人物をヒジュラ暦749年(1348/1349)にエジプトで死去したシャムスッディーン・アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・アルアシュアリー(Shams al-Dīn Abū 'Abd Allāh Muḥammad al-Ash'arī)に想定している。彼には、ペルシアのシーラーズの判事(qāzī)を務めた法学者アブドゥッラー・アルバイザーウィー('Abd Allāh al-Baiḏāwī 13世紀末ごろ没)の著したクルアーン解釈に対する注解書があるという[Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 117, n. 4]

の道を知っており、誰も彼も死滅の道をたどることがないのだとしたら、知り合いの人々は慰問と弔慰によって心が満たされるというようなことはなくなるであろう。この隊商宿（現世）においては何人も長らく<sup>とど</sup>留まっていることがないからには、どうして我慢無さ（nā-shikibā'i）という非難を蒙ることなどしてよかろうぞ」。治世第37年（1592年3月11日—1593年3月10日）にアブル・ファズルは官位二千位に昇進した。

アブル・ファズルが皇帝の信頼を勝ち取って確固たる地位を占めるようになると、皇子たちの怨嗟が生じ、さらに貴顕たちの怨嗟はいうまでもないまでとなった。アブル・ファズルが皇帝勤仕において常に占める地位は外形（'arz）と内実（jauhar）を兼ね備えているかのようであって、何事も彼の同意なしには進捗しない有様であった。そこで何人かの人々は彼をデカン地方に送り出すよう皇帝に懇願した。よく知られていることとして次のようなことがあった。皇子サリームがさる日アブル・ファズルの家にやってきて、40人の筆耕たちが座ってクルアーンとその注釈を筆写しているところを目撃した。サリームは筆耕たち全員を、〔出来合いの〕クルアーンの各章をも携えて皇帝のもとへ連れて行った。そして次のように悪し様に思い込んだ<sup>4)</sup>。「彼は我々には別のことを扇動しておきながら、自分の方は私邸に戻るとそれとは違ったことをやっているのだ」と。その日以来、2人間の近づきやすさ（qurb）と親密さ（muṣāḥabat）は地に落ちた<sup>5)</sup>。

(611) 治世第43年（1598年3月11日—1599年3月10日）に皇子ムラードを連れ戻すため、アブル・ファズルはデカンのムガル朝支配区域（dastūri）に赴任した。彼への命令は、もし赴任中の高官たちがかの地の監督（nigah-dāsht）を責任もって果たしているならば、彼は皇子とともに宮城に戻ってくるように、あるいはまたそれが難しい場合は皇子を宮城へ向けて送り出してにおいて、自らはミールザー・シャールフ（Mirzā Shāhrukh）<sup>6)</sup>の支援を得て業務を遂行するように、というものであった。

4) 原文は、hama-rā ba-ajzā'-i kitāb nazd-i pād-shāh burda bad maḥanna sākt. 主語は省かれているが前文から見て皇子サリームであり、「悪し様に思い込んだ」のはサリームであることは原文から明らかであるように思われる。しかし英語版はこのように思い込んだのは皇帝アクバルであったとする立場で翻訳し、さらに脚注で、予想されるアクバルの思いを表現したものであるとする説明を補記しているが、説得力はどうであろうか [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 119, n. 1]。一方『アクバル会典』のテキスト校訂者であり、またその英語版第1巻の翻訳者であるヘンリー・ブロックマンの方は、英語版第1巻に付したアブル・ファズル伝のなかでこの事件に触れた際、この事件を契機にしてアクバルとアブル・ファズルの関係が一時的に疎遠になった旨述べている [Blochmann & Jarrett (trs.) 1873-1894: I, xvi]。

5) このような表現で示される関係はサリームとアブル・ファズルとの関係であって、皇帝アクバルとアブル・ファズルとの関係を『マアール・ウマラー』の著者はこうした表現で示すことは決してしなかったであろう。

6) 中央アジア、バダフシャン地方のティムールの血を引く王族出身者。1575年にこの地方の支配者となったが、1584年同地がウズベクのアブドゥッラー・ハーンの支配に帰すと、インドに逃亡してアクバルの庇護を受け、中央インドのマールワ地方を委ねられて、ムガル朝のデカン遠征軍を支援した。1607年ウッジャインで没。

アブル・ファズルがブルハーンに到着すると、ハーンデーシュ地方の支配者 (marz-bān) であるバハドゥル・ハーン (Bahādur Khān) ——アブル・ファズルの妹 (ham-shīra) が彼の弟のところへ嫁いでいた——が自分の館に案内して歓待の程を示そうとした。アブル・ファズルは言った。「もし貴殿が皇帝の事業に協力することを承諾されるのであれば、ご招待に応じましょう」。こうした〔アクバルに協力する〕道は論外であったので、バハドゥル・ハーンは何着かの絹の衣類並びに貴重な品々を贈り物として送り届けた。アブル・ファズルは神に誓いを立て、どのような人との間においても次のような4つの条件が揃っていなければ、誰からも物を受け取らないことにしていた。第1は親愛に満ちたもの (dūsti) であること、第2は贈り物が高価であると見込めないもの、第3は自ら所望したものではないもの、第4は自分にとって必要なものであること、である。これら4つの条件のうち3つの条件は叶っていたが、しかし4番目の条件は、皇帝の慈愛によって彼の必需品はかき消されてしまっている以上、どうしてこれが叶うことなどありえようか。

皇子ムラードは失望のうちにアフマドナガルから帰還して長期の倦怠感に陥り、そのうえ彼の息子ルスタム・ミールザー (Rustam Mirzā) の死去が重なって、ご機嫌取りたちの黙認するままに飲酒に溺れ、果ては痙攣症 (sar') を患ってしまった。彼は召還のうわさを耳にして、アフマドナガルの方へ向かって出発した。この進撃をもって宮中に伺候しない口実とするためである。彼はプールナ (Pūrna タプティー川の一支流) 川のほとりのディーハーリー (Dihārī) の近くにまで至り、1007年 (1599) に永劫の世界に到達した。まさに (612) その日に、アブル・ファズルもまた急いで〔ムラードのいた〕陣営地に入営した。

深刻な動揺が発生した。兵卒も将校も退却したいとの思いを抱いたのだ。アブル・ファズルの考えは、敵が近くにおり〔自分たちの方は〕未知の土地のただなかにいるというような時に引き返すのは、自ら破滅のなかに飛び込むようなものだ、というものであった。多くの将兵たちが激怒して脱隊を望んだにもかかわらず、アブル・ファズルは強靱な意志と健全な精神でもって全軍の将校と兵士たちに対する慰撫を果たし、勇躍アフマドナガルへ向かって進発した。そして短期間のうちに脱隊の将兵たちを糾合し、支配領域全体を見事に防衛した。しかしナーシク (Nāsik)<sup>7)</sup> は遠方に位置しているため、再征服の埒外におかれた。けれども、例えばバイターラ (Baitāla)<sup>8)</sup>、タルトゥーム (Taltūm)<sup>9)</sup>、ストーンダ (Sutonda)<sup>10)</sup> の各城塞のような多くの領土が帝国に併合された。

またアブル・ファズルはガング川 (Gang ゴーダーヴァリー川) のほとりに軍隊を駐屯

7) デカン北西部、ゴーダーヴァリー川上流右岸に位置するヒンドゥー聖地。ラーシュトラクータ朝の都がここに置かれたこともあった。

8) ベラル地方の最西部に位置する県城所在地。この県の西にはアフマドナガル王国がある。

9) バイターラの西隣に位置する町。

10) タルトゥームの西南西20キロメートル余に位置する町。

させ、あらゆる方角に適切な部隊を配置した。そしてチャンド・ビービー (Chānd Bibī)<sup>11)</sup> と信書を交わして、次のような協約を結んだ。即ちチャンド・ビービーは、彼女と反目中のアビッシニア人 (Ĥabashī) アーバング・ハーン (Ābhang Khān アーハング・ハーン Āhang Khān とも)<sup>12)</sup> が懲罰を受けた際には、ジュナイル (Junair)<sup>13)</sup> を領地 (iqṭā') として獲得し、アフマドナガル城をムガル軍に引き渡すというものである。アブル・ファズルはシャーガド (Shāhgadh)<sup>14)</sup> からアフマドナガルの方角に向けて進発した。

この間にアクバルの方はウッジャインに到着し、アシールガル要塞の支配者バハードゥル・ハーンが皇子ダーニヤールの謁見に姿を見せなかったので皇子は彼を懲らしめようとしている、との知らせを受けた。そこで皇帝はブルハーンプルに向けて出発するとともに、皇子に奮励してアフマドナガル城を抜くよう書簡を書き送った。(613) そのために皇子からの書簡が繰り返しアブル・ファズルのもとに届き、それには次のように書かれていた。乃公の事業探索は遠近の歓迎を受けている。皇帝はアフマドナガルを余が征服することを望んでおられる。貴殿はこの征服事業から手を引いてもらいたい、と。

皇子ダーニヤールがブルハーンプルから出発すると、アブル・ファズルは勅令に従ってミールザー・シャルフをミール・ムルタザー (Mir Murtaẓā) およびホージャ・アブル・ハサン (Khwāja Abu'l-Ḥasan) とともに陣営に残して、自らは宮廷に伺候するために出発した。ヒジュラ暦 1008 年ラマザン月 14 日 (1600 年 3 月 19 日) にして、また治世第 45 年 (1600 年 3 月 10 日—1601 年 3 月 9 日) の年初に当たり、アブル・ファズルはビージャーガダ (Bijāgadhā)<sup>15)</sup> のカルガーヌーン (Kargānūn) 近くで、叩頭拝をして宮殿<sup>16)</sup> の敷居に幸運の額をぬかずけた。アクバルの口唇を次のような対句がよぎった。

幸いの夕べと快い月光こそ望ましけれ

汝と種種について語らんがためには

アブル・ファズルはミールザー・アジーズ・コーカ (Mirzā 'Azīz Koka)<sup>17)</sup>、アーサフ・ハーン・ジャーファル (Āṣaf Khān Ja'far)<sup>18)</sup>、シャイフ・ファリード・バフシー (Shaikh

11) アフマドナガル王国第 3 代国王の王女。政略結婚によって南隣のビージャーブル国王に嫁したが、夫の死後故国に帰りその政治に深く関与した。1596 年、ベラルール地方のムガル朝併合を承認。1603 年、自軍によって殺害された。

12) ニザーム・シャーヒー朝アフマドナガル王国のアビッシニア系武將。

13) アフマドナガル王国の国都アフマドナガルを中心とした一帯がアフマドナガル県。ジュナイルはその西方に隣接する広大な県名およびその中心都城名である。ジュンナル (Junnar) ともいう。

14) アフマドナガルの東北東の方角、ゴードーヴァリー川北岸に位置する町。

15) ビージャーガル (Bijāgarh) ともいい、マールワ州最南部の県名、および同名の町を指す。マンドゥの南方に位置し、ハーンデーシュの州都ブルハーンプルからも遠くない。

16) この宮殿は、いうまでもなくテント仕立てで急造された移動式の宮殿である。

17) アクバルの乳兄弟。一時アクバルと疎遠になり、メッカ巡礼に出たが、帰国後再びムガル朝の高官となった。1624 年死去。また近藤 2009A: 106, 注 51) も参照。

18) イランのカズウィーン生まれ。青年時代にインドに来入してアクバル治下のムガル朝に仕え、1581 年にアーサフ・ハーンの称号を得る。1598 年、財務長官 (diwān) に就任。1612 年死去。

Farid Bakhshi<sup>19)</sup> と共同してアシルガル要塞を包囲するよう命じられるとともに、さらにハーンデーシュ地方の統治も彼に委ねられた。彼は自分の部下たちとともに息子（アブドゥル・ラフマーン）と弟（アブル・バラカート<sup>20)</sup>）も同道させ、ハーンデーシュ内 22カ所にターナ（thāna 治安対策上の地区）を設定して、不穩者たちの沈静化に意を注いだ。この当時、彼は官位四千位の榮譽ある旗幟を掲げることとなった。

さる日、アブル・ファズルが塹壕の視察に出かけていたときのこと、塹壕の兵士たちと接触をもっていた籠城軍側の一人が、〔出城の〕マーリー（Māli）城塞の壘壁へと通じる一筋の間道を打ち明けた。何故かといえば、アシルガルの山岳の中腹には西方と（614）やや北寄りとにマーリーとアンタルマーリー（Antar-māli 「別のマーリー」の意）との2つの有名なマーリーすなわち<sup>とりで</sup>砦（qil'a 日本の山城の<sup>くるわ</sup>曲輪に相当）があって、かの本丸のアシルガル城塞に突入しようとするれば、先ずこれら2つの砦を突破しなくてはならないことになっていたからである。さらに〔ブルハンプルの側から見て〕北北西と北東の方角には同様にマーリーと称する砦があり、これらはジューナマーリー（Jūna-māli 「旧マーリー」の意）と呼ばれている。〔敵兵の一人が打ち明けた〕件の壘壁には、僅かな仕残し部分が存在する。また東から南西にかけても低い山々が広がっており、南の方角にシトコールタ（Sit-kortha<sup>21)</sup>）と呼ばれる高山が、また南西の方角にはシトサーピン（Sit-sāpin<sup>22)</sup>）と呼ばれる高山がそれぞれ控えている。

最後に挙げたジューナマーリーの1つがムガル軍側の手に落ちていたので、アブル・ファズルは塹壕の部将たちに次のように指令した。太鼓とトランペットの音を耳にしたら、全員<sup>はしこ</sup>梯子を持って〔塹壕の〕昇降口に出て大太鼓を打ち鳴らされよ、と。アブル・ファズル自身は雨雲の覆う闇夜に自分の部隊を率いてシトサーピンの頂上まで登り、部隊に問題のかの間道を示して彼らを送り出した。彼らは出撃してマーリーの城門を破壊し、マーリー城塞内に入って太鼓とトランペットを鳴らした。マーリー城塞内の守備隊は応戦した。アブル・ファズルは足速に走り、明け方近くにマーリー城塞に到着した。守備隊側は混乱し、アシルガル城塞のなかに逃げ込んだ。昼になると、ムガル軍のある部隊はシトコールタから、また別の部隊はジューナマーリーからというように、あらゆる方角から攻撃を加え、大勝利を獲得した。

19) アクバル死去の際にアークラの警備責任者となったシャイフ・ファリード・ブハーリー（Shaikh Farīd Bukhārī 1616年死去）を指すものと思われる。

20) アクバル治下のムガル朝に仕えていたアブル・ファズルの弟は、2歳違いのAbu'l-Barakātと9歳違いのアブル・ハイル（Abu'l-Khair）の2人であったが、ハーンデーシュに同行していたのはアブル・バラカートであったはずである。

21) このように読んでおくと、底本614ページの脚注によるとkorthaは別の写本ではkorhiyaとなっているということであるので、その場合は「白癩山」の意に近くなる。sitをsatと読めば、また別の意となる。

22) sāpinはsāpinと同じく雌蛇を意味するので、全体で「白蛇山」の意に近くなる。

バハードゥル・ハーンは保護を申し出て、ハーン・アーザム・コーカ (Khān A'zam Koka)<sup>23)</sup> の執り成しで皇帝拝謁の幸運を手に入れた。皇子ダーニヤールがアシールガル要塞の勝利を自らの祝福によって飾るために皇帝謁見を果たしている間に、〔アフマドナガルでは〕(615) ラージュュー・マナー (Rājū Manā)<sup>24)</sup> によって引き起こされた騒乱、ならびにアフマドナガル国王の叔父シャー・アリー (Shāh 'Ali) の息子を即位させようとする事件が発生した。ハーニ・ハーナーンはアフマドナガルへの帰任を、またアブル・ファズルはナーシク地方の平定をそれぞれ拝命した。しかしながらシャー・アリーの息子を支持して多くの者たちが騒動を起こしていたので、アブル・ファズルはナーシクに向かう中途から勅命に従って引き返し、ハーニ・ハーナーンと共にアフマドナガルの方に向かって進んだ。

治世第46年にアクバルがブルハーンプルからヒンドゥスターンに帰還すると、皇子ダーニヤールはブルハーンプルに滞在地を移した。ハーニ・ハーナーンはアフマドナガルに居を移し、軍隊の司令権と召集権はアブル・ファズルの手に移った。アブル・ファズルはシャー・アリーの息子と抗争の後に協定を結び、ラージュュー・マナーの追跡に向かった。そして占拠されていたジャールナプル (Jālnapūr)<sup>25)</sup> とその一帯を解放し、ダウラターバードおよびラウザ (Rauza)<sup>26)</sup> へと至る道を急いで追跡し、チャトワラ (Chatwāra) の陣営 (katak) で降り立ってラージュュー・マナーに度重ねて戦いを挑み、その都度勝利を博した。ラージュューはしばらくの間ダウラターバードに難を避けた後、再び攻撃をかけてきた。そして小競り合いの後にラージュューは逃げ出し、すんでのところで捕えられそうになって、ダウラターバード城の堀に飛び込んだ。彼の所持品は没収された。

治世第47年(1602年3月11日ー1603年3月10日)になると、皇子サリームのいくつかの所業の発生によってアクバルの機嫌は損なわれた。アクバルは、宮廷内の勤仕者たちが皇子の方に靡いており、(616) また廉直さや正義感、信頼感、親近感の面で何人もアブル・ファズルに及ぶ者がいないために、彼をデカンから呼び寄せることにした。下命内容は、配下の軍隊を彼地に残し単独で急ぎ帰還せよ、というものであった。アブル・ファズルは、自分の息子アブドゥル・ラフマーンに配下の軍隊並びに支援の将校たちを委ねてデカンに残し、自らは大急ぎで帰還の途に着いた。

ジャハーンギールは、アブル・ファズルが皇帝の寵愛に応えて過度の忠誠と献身を尽くしていることに苛立ちを覚えていた。彼は、アブル・ファズルがこの期に帰還するのは〔自分の計画に対する〕妨害者に外ならぬと考え、またアブル・ファズルが単独行であるのは襲撃

23) すなわち注17) のミールザー・アジーズ・コーカ。

24) ラージュュー・マナーによる騒乱については、後続の記述を参照。

25) アフマドナガルの東方に位置するパイタン (Paithan) 県の東側に隣接する県および県城所在地の名称。

26) ラウザは墓を意味するが、ここでは後になってアウラングゼーブが埋葬されることになる墓廟が設けられるフルダーバード (Khuldābād) を指す。この町はダウラターバードの北方に位置し、エローラの窟院も近い。

の好機であるとも考えた。否それどころか、浅知恵のなせるところからアブル・ファズルを亡き者とするのが皇帝位を手に入れる第一の足場であると考えた。そこで、アブル・ファズルがブンデーラ (Bundela)<sup>27)</sup> のビルシング・デーヴ (Birsingh Dev) の領土を通過することは不可避であるところから、さまざまな甘言でもってビルシング・デーヴに期待を持たせ、アブル・ファズルを殺害するよう唆かせた。

ビルシング・デーヴはアブル・ファズルを待ち伏せして、その機会を狙っていた。ウッジャインでこの知らせがアブル・ファズルのもとに届くと、兵士たちはガーティー・チャーンダ (Ghātī Chānda)<sup>28)</sup> の峠を通る道を急いで進むべきだと言上した。アブル・ファズルは言った、「追剥どもに私の進む大道を塞ぐどんな力があるというのか」。1011 年第 1 ラビー月 4 日金曜日 (1602 年 8 月 12 日)、ナルワル (Narwar)<sup>29)</sup> から 6 コース (kos インド里、1 コースは約 3.6 キロメートル) 離れたビール (Bir) の旅宿<sup>30)</sup> から半コースのところで、ビルシング・デーヴが多数の騎兵と歩兵を引き連れて襲撃した。アブル・ファズルの支援者たちは、彼が戦闘地から立ち離れるように説得しようとした。アブル・ファズルの知己の一人ガダーイー・アフガーン (Gadāī Afghān) が言った、「隣接するアントリー (Antri)<sup>31)</sup> の町にはラーエ・ラーヤーン (Rā'e Rāyān) とラージャ・スーラジ・シング (Rāja Sūraj Singh) が 3 千の騎兵を従えて待機中でありませう。彼らと提携して敵を懲らしめてやるべきです」。アブル・ファズルは (617) 逃亡の不名誉を我が身が背負うことを承服せず、勇敢に生命を潔く投げ出した。

ジャハーンギールは自ら次のように書き残している。「シャイフ・アブル・ファズルは父帝に次のように知らせていた。すなわち、最後の避難所である御方 (Janāb-i Khatmī Panāhī 預言者マハンマド) —— 神の加護と平安が彼とその子孫の上に加えられますように —— は完璧な能弁に恵まれており、クルアーンは彼の語ったものであります<sup>32)</sup>、と。このために、アブル・ファズルがデカンから帰還する時、私はビルシング・デーヴに彼を殺害せよと伝えた。このことがあってから、父帝は考え方を修正した」。

古くから続くチャガタイ・トルコの風習によると、王子たちの死去は明らかに王に伝え

27) 現マールワ州東部のヤムナー川の南、ヴィンディア山脈の北の地域を 14 世紀以来支配していたラージプート系の好戦的な一部族。

28) チャンバル川の一支流カーリー・シンド (Kālī Sind) 川がウッジャイン東方においてマールワ地方を北流しており、この辺りの森林地帯のなかにある峠の名称。東経 76 度、北緯 25 度弱に位置している。ダッラ・ガーティー (Darra Ghātī)、ダラ・ガーティー (Darah Ghātī) ともいう。

29) アーグラ県南西部のマールワ州およびアジュメール州と接する州境に位置する県名、並びにその県域名、この町は、アーグラとプルハーンブルを結ぶ幹線道路上に位置している。

30) ヘヴァリッジによると、この旅宿はタヴェルニエの旅行記に出てくる Barquisera、すなわち Barkī Sarāy に当たるとのことである [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 123, n. 1]。

31) アーグラとプルハーンブルを結ぶ幹線道路上の町で、グワーリアルスの南方約 18 キロメートルのところに位置する。

32) すなわち、神の語った啓示ではない、の意。

ず、王子の宮中代理人 (wakil) が藍色のハンカチを腕に結わえて伺候し、それによって明らかになった。宮中に勤仕する者は誰もアブル・ファズルの惨事を敢えて言上する勇気がなかったため、彼の代理人が如上のような風習を実行した。アクバルは皇子たちの死去に対してよりも一層悲嘆にくれた。そして説明を聞いた後に、次のように言った。「もし皇子が皇位を望むのなら、余をあやめアブル・ファズルを守ればよいものを」。そして次のような対句の即興詩 (badāhat) を詠んだ。対句 (bait)。

余がシャイフは限りなき望みを抱き余がもとに來たれり

余が足への口づけを望みながら首も足もなく來たれり

ハーン・アーザム (ハーン・アーザム・コーカ) はアブル・ファズル死去の年代表示銘 (ta'rikkh) をなぞめいた (ta'miya) 具合に次のように詠んだ。

アッラーの預言者の驚異の剣、不信者の項を刎ねり<sup>33)</sup>

アブル・ファズルは〔ハーン・アーザムの〕夢のなかに現われて、「私の死の年代表示銘は神の僕アブル・ファズル (Bandah Abu'l-Fazl)<sup>34)</sup> だ。どうして神の工房で取り乱しているのか。神の恵みは広大であり、何人も絶望することはないのだ」と言った、といわれている<sup>35)</sup>。

(618) ラホール<sup>36)</sup>の聖者の一人であるシャー・アブル・マアラー・カーディリー (Shāh Abu'l-Ma'ālī Qādirī) に関していえば、この聖者は次のように語ったといわれている。「私はアブル・ファズルの行ないに反対であった。さる夜、私は次のような夢を見た。預言者の衆会においてその御方はアブル・ファズルを招じ入れられ、聖なる外套 (juba-yi mubāarak) を彼の肩に掛けられて、衆会の席にお着かせになった。そして次のようにお述べになった。『この者は数日の生命の間 (即ち一生の間) に繰り返して悪業を行なった。しかしながら、次のような彼の祈禱の言葉が彼の救済の誘因となった。それは彼が詠んだ次のような冒頭句 (ibtidā') である。“おお神よ、善良の人々には善業を嘉して栄光を与えたまえ。善しなき人々には慈愛によって慰めを恵みたまえ”』<sup>36)</sup> と」。

アブル・ファズルに対する背教の非難は、上下を問わず多くの人々の口によく上る。ある

33) *Zakhirat al-Khawānin* では「預言者」を rasūl で表わしていたが、ここでは nabi で表わしている。それ以外、この半句は全く同じである。「不信者の項を刎ねり」なる表現中の不信者 (bāghī) なる語を構成するアラビア文字4文字の各数値の合計1013から冒頭の文字 ba の数値を除去すると1011、すなわちアブル・ファズル死去の年であるヒジュラ歴1011年(1602)の数値が表示されることになる。

34) この語句に含まれるアラビア文字の数値の合計は1011となり、アブル・ファズル死去のヒジュラ歴1011年の数と一致する〔近藤2009A:106,注54〕。

35) この辺りの記述は、*Zakhirat al-Khawānin*: I, 75の記述とほぼ完全に一致する〔近藤2009A:106-107〕。

36) この対句は *Zakhirat al-Khawānin* 所収のものとはほぼ一致しているが、「善しなき人々には御身 (khwud) の慈愛によって」ところの khwud がここでは省かれている。この対句をはじめ、シャー・アブル・マアラー・カーディリーの言行については、近藤2009A:107,注56) 参照。

人々は彼がバラモンの信仰 (kesh-i barahman ヒンドゥー教) に組していると非難し、別の人々は彼が太陽崇拝者 (āftāb-parast ゾロアスター教徒) であると言い、さらに別の人々は彼が世俗主義者 (dahriya) であると見なしている。アブル・ファズルを極度に忌避する者は、彼が極端派 (al-ḥadd) にして異端派に属していると主張する。

イスラーム神秘主義者 (mutaṣawwifa) の同調者たち—— そのなかには彼の名声中傷する者も何人かはあるが<sup>37)</sup>—— のような公正さに努めようとする他の人々は、アブル・ファズルには普遍的和解 (ṣulḥ-i kull) や気宇無辺 (wus'at-i mashrab), 百論擁護 (iddi'ā-i hama) が備わっているとし、またイスラーム法の端綱 (ribqa-yi shari'at) の寛和や合法的スーフイー教団 (ṭariqa-yi ibāḥat) の保証 (iltizām) も彼に依るものであるとしている<sup>38)</sup>。

『アーラム・アーラーイ・アッパシー』(Ālam-ārā-yi 'Abbāsi) の著者<sup>39)</sup>は次のように述べている。シャイフ・アブル・ファズルはヌクタ主義者 (Nuqtawī)<sup>40)</sup> であった。というのは、この連中 (ṭā'ifa) の指導者たちの一人でありヌクタ論 ('ilm-i nuqta) に関する諸論文の著者であるミール・サイイド・アフマド・カーシー (Mīr Saiyid Aḥmad Kāshī)<sup>41)</sup> に対して認められた公文書 (manshūri) があるといわれるからである。ヒジュラ暦 1002 年 (1593/1594) にペルシアではこの異端信奉者 (mulhid-kāshī) たちが決起した際、シャー・アッパースはカーシャーンにおいてミールを自らの手で処刑した。かの公文書で述べられているところによれば、(619) そこでは不敬なヌクタ論と明暗二元論 (zandaqa) と放逸

37) ダーシのなかに入れたこの挿入節は、直前の「イスラーム神秘主義者の同調者たち」にかかる関係節であるが、原文 ki bad-nām kunanda-yi neko-nāmi chand-and を英訳者ベヴァリッジは who...give good names to those who have a bad name と訳している。この訳は当を得ていないであろう。

38) 「イスラーム神秘主義者の同調者たち」に始まるこの長い文章は、アブル・ファズルの宗教思想史上の位置づけを行なった重要な一文であるが、ベヴァリッジは Others in whom justice prevails and who, like the followers of mysticism, give good names to those who have a bad name, rank him among the followers of "Peace with all," and with those who are of a wide disposition, and accept all religions, and are relaxers of the Law, and are free-thinkers. というように大幅な意識で済ませているのは残念である [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 124-125]。

39) 著者はイスカンダル・ベグ・ムンシー (Iskandar Beg Munshi)。この書はサファヴィー朝のシャー・アッパース時代を中心にした年代記である。

40) ペルシアのギーラーン地方出身のマフムード・パシーハーニー (Maḥmūd Pasikhāni 1428 年ごろ没) が興した新興のヌクタ教団 (Nuqtawīya) の支持者。教祖の名に因んでマフムード教団 (Maḥmūdiya) とも呼ばれる。ヌクタ (nuqta) は点を意味し、万物の根源である土の微粒子 (nuqta-yi khāk) から植物、次いで動物が順次派生すると考えるところから、この教派名は由来する。サファヴィー朝初期のころ、テヘラン南方のカーシャーン (Kāshān) を中心にして教勢を拡大したが、シャー・アッパースの徹底した弾圧策を受けて衰滅し、一部の信者はアクバル時代のインドに避難したといわれる。詳しくは H. Algar, "Nuqtawīyy", *EF<sup>2</sup> VIII*, 114-117; Blochmann (tr.) 1873: I, 452-453 参照。

41) ヌクタ派の詩人。シャー・アッパースによるヌクタ派鎮圧時に、カーシャーンの彼の自宅からこの派の指導者たちのリストや、アクバルが宗教的寛容について述べたシャー・アッパース宛の書簡 (アブル・ファズルの執筆) が発見された、という。

(ibāhat) と敷衍 (tausī)<sup>42)</sup> がごたまぜになっている<sup>43)</sup>。またヌクタ主義者たちは哲学者たち (ḥukmā) のように世界の永遠性 (qidam) を信じ、復活 (ḥashr) と最後の審判の日 (qiyāmat) を否定し、さらに所業に対する善と悪 (ḥusn u qubḥ) の応報や、天国と地獄 (jannat u nār) をこの世における繁栄と零落のうちに認めている。

アブル・ファズルは上述のような特性を有していたが、それにもかかわらず有能で正確な理解力、並びに真理の探究心や細部に亘る研究心を備えており、彼のこうした天分は世間的重大事や慣習化した諸前提に対しても正鵠 (naqir u qitmir) を誤ることは決してなかった。何故に彼は知識人たちの集団のなかに加わりとせず、居心地のよい方向 (ṭarf-i rājiḥ) に進もうとしなかったのか。移ろいやすい (nā-pāy-dār) この世の俗事 (kār-i dunyā) にかかわる者は、自らの至らなさ (ziyān) に思いを凝らさないものであり、我が身に被害の及ぶことを認めようとしないものである。永遠にして不朽なるあの世の事柄 (kār-i 'uqbā) に関し、何故に彼は知見を得ながら迷妄の道を選ぼうというのか。神が迷わしたもうた者には、いかなる導き手もない (『クルアーン』第7章第186節冒頭句)<sup>44)</sup>。

事情を調べてみると、次のようなことが明らかとなった。アクバルは理解力がまだ初期の段階であったころから、インドの諸々の慣習 (rusūm) と風俗 (auzā') に対して全幅の好意を抱いていた。その後、彼はペルシアの君主シャー・タフマースプ (Shāh Ṭahmāsp 在位1524-1576) の忠告 (irshād) を受け入れた父帝の遺訓に従った。シャーは〔フマールンとの〕会談中、インドの状況の特別な事情と帝国の混乱 (bar-ham-zadagi) の発生について尋ねた後、次のように述べた。「ご存じのように、インドには軍人職 (sipāhgārī) および万騎長の位 (tumandārī) に適した者たちとして二つの集団が存在します。アフガンとラージプートです。目下のところ、アフガンを味方に付けることは不可能です。信頼関係がないからです。アフガンは (620) 商業に就かせ、ラージプートと協調し訓練していくのがよいでしょう」。

アクバルはこの集団 (jamā'at ラージプート集団) との提携を国家の主要な事業に属するものと考え、最大限の努力をしつづけた。その結果、ついには例えば牛の犠牲の禁止や顎鬚剃り、真珠の耳飾りの装着、ダサハラ祭 (dasahra)<sup>45)</sup> やディーワリー祭 (dīwālī)<sup>46)</sup> の祭礼その他の事柄の遵守を行なうまでに至った。アブル・ファズルは皇帝の意向に対して

42) ベヴァリッジはこの語を広教会主義 (broad churchism) と訳している [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 125]。

43) この一文はアブル・ファズルがアクバルに代って執筆したというシャー・アッパース宛の公文書なるものの内容に触れたものであるが、この公文書の確かな根拠については何も明らかにされていない。

44) 藤本勝次・伴康哉・池田修訳『コーラン』I, 中央公論新社, 2002年, 213ページ。

45) インド暦アーシュヴィン月に10日間行なわれるラーマの対ラーヴァナ戦勝利記念の祭礼。ダシャハラ (ダシャーラー) 祭。またガンジス川生誕を祝うガンガダシャハラ祭もある。

46) インド暦カーティク月に行なわれる灯明の祭。商家では、秋に行われるこの祭礼を期して新年とし暦を取り替える風習がある。

影響力を有してはいたけれども、おそらく高位高官への欲求を持っていたために逆らうことができなかつたのであろう。こうしたことすべてが結びついて、彼に跳ね返ってくることとなった。

『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』は次のように述べている。アブル・ファズルは夜な夜なダルウィーシュ (darwish 托鉢僧) たちの居所に出向いて金貨を手渡し、「アブル・ファズルの信仰の安寧のために祈禱せよ」と懇願した。また彼は次のような言葉を折返し句 (bār-gīr) として口にした。「さて、何をなすべきか」と。そして手で膝を叩いて低い嘆息を漏らした。彼は悪態を口にするとはなかつた。彼の統轄区域 (sarkār) 内では中傷や業務不履行 (ghair-ḥāziri), 俸禄差っ引き (bāz-yāft), 解職 (furūghī)<sup>47)</sup> は決して起こらなかつた。また徴税官 (āmil) に任命した者は誰でも、間違いを仕出かすようなことがあつても、できる限り更迭 (taghaiyur) はしなかつた。彼はよく口にした、「事情に通じていないのにどうしてあの者が徴税官に昇進したのかと言って、人々は我々の浅知恵を非難することになろう」と<sup>48)</sup>。

太陽が白羊宮に移行する日に、すべての作業部屋は彼の点検を受けた。在庫類は記録して自分の身近に保管し、帳簿類は焼却した。(621) そして着古した衣類のうちスポンは彼の目の前で焼却させ、残余はすべて新年元旦 (nau-roz) の日に使用人たちに分配する慣わしであつた<sup>49)</sup>。彼は並外れた食欲を持っていた。伝えられるところでは、水と薪 (hema)<sup>50)</sup> 以外に、彼には1日当たり小麦粉22セールの割り当てがあつた。彼の息子のシャイフ・アブドゥル・ラフマーンが給仕役となつて座すのが常であつた。調理場主任はイスラーム教徒であつたが、彼は立ったまま注意深く観察していた。食事の際にアブル・ファズルが2度手を付けたものは翌日も料理された。食物がまずいと彼は息子に食べさせた。息子は料理人たちのところへ行つて叱責したが、アブル・ファズル自身は一切口に出さなかつた<sup>51)</sup>。

伝えられるところでは、デカンの防衛 (yasāq) 中、彼はこれ以上は想像することができないほど慣例と規範によく則つて事を運んだ。巨大テント (chihil-rāwuti) にはアブル・

47) furūghī について、ベヴァリッジは「[役人たちの官職の] 没収 (confiscation)」と訳し、また注記でこの語が役人たちの官職からの追放を意味した可能性のあることも指摘している [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 126, n. 3.]。今は彼の説に従つておく。

48) このパラグラフに示されたような『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』の記述内容については、近藤 2009A: 104 参照。

49) このパラグラフの以上のような内容は、『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』を紹介した近藤 2009A: 104 にも示されている。

50) 近藤 2009A: 103 では hema を「ミンチ肉入りスープ」の意に取つたが、これは明らかに誤訳であり、「薪」が正しい。Steingass 1892: 1522 には確かに「薪」の意を載せており、Platts 1884: 1245 も hīma の発音で同じ意を載せている。ベヴァリッジは正しく「燃料」(fuel) と訳している [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 127]。

51) このパラグラフ後半に示された以上のような内容は、『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』の記述と一致する [近藤 2009A: 103-104]。

ファズル用の饗応者の座 (masnadi) が設けられ、毎日千食に上る特別の振舞い食が用意されて、あらゆる貴顕たちに分配されていた。その外側には九尺天蓋 (nuh-gazi) を張り、身分の低い者も高い者も誰にでも、一日中炊き出される豆粥 (khichri) が提供されるよう周知されていた<sup>52)</sup>。

次のようにも伝えられている。アブル・ファズルが絶大な権限を任された宰相 (wakil-i muṭlaq) であったとき、ある日ハーン・ハーナーン<sup>53)</sup>がタッタ州 (Ṭaṭṭha インダス川下流域一帯) 総督ミールザー・ジャーニー・ベグ (Mīrzā Jānī Beg)<sup>54)</sup>と一緒にアブル・ファズルに会いにやってきた。アブル・ファズルはベッドの上に横たわり、ひたすら『アクバル・ナーマ』を見ているだけで、彼らの方に注意を向けることもなく、ただ「お二方、こちらに来てお掛け下さい」と言うだけであった。ミールザー・ジャーニー・ベグは帝国の枢要部 (damāgh-i saltanat) にいる人物であったので、(622) 我が身を非常に傷つけられた思いでその場を去った。ハーン・ハーナーンは別の折、懇願に説得を重ねてミールザーをアブル・ファズルの居宅に再び連れて行った。アブル・ファズルは門のそばまで出迎え、しきりに謙譲の意を表した。そして言うには、「私共は貴殿の使用人であり、また市民でもあります」<sup>55)</sup>。ミールザーは驚いてハーン・ハーナーンに尋ねた、「前回の尊大さといい、今回の謙遜ぶりといい、一体どうしたというのだろうか」。ハーン・ハーナーンは次のように語った。「前の日は『アクバル・ナーマ』に没頭して書中の] 宰相職の規範 (toragī-yi wikālat) を思い浮かべながら、例えば誰かの願いをかなえてやることに懸命になっていたのだが、今日は親愛の情をもって我々に会ってくれているのだ」。

これらの事柄すべてを傍にやって〔冷静に考えて〕みると、アブル・ファズルは文体の術 (fann-i inshā') において魅力的な方法 (ṭarqa-yi siḥri) を編み出していたのだ。彼は筆耕風の形式主義 (takallufāt-i munshiyāna) や右筆風の高慢さ (taṣallufāt-i mutarassilāna) とは無縁である。しかしながら、言葉の持つ威力、諸々の語を結ぶ結集力 (ustukhwān-i bandī), ユニークな用語 (mufradāt) と見事な合成語 (tarākīb) の使用、さらに類例を見ない

52) このパラグラフとはほぼ同一の表現が『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』に収められている [近藤 2009A: 103]。

53) ハーニ・ハーナーン (Khān-i Khānān) に同じ。バイラム・ハーンの息子アブドゥル・ラヒーム・ハーン ('Abd al-Rahīm Khān) をさす。

54) タッタ地方の独立政権最後の君主であったが、アブドゥル・ラヒーム・ハーンの率いるムガル軍によって 1590 年に併合されたため、彼はムガル朝のタッタ州総督に叙された。1599 年没。彼の娘がアブトウル・ラヒーム・ハーンの息子に嫁したため、両者は姻籍関係にあった [Beale 1894: 198]。

55) 原文 mā makhādīm wa ham shahri-yi shumā-im 中の makhādīm は makhādīm の誤記であったと思われる。その論拠としては Platts 1884: 487 の khadam および同: 1011 の makhādīm の説明が参考になる。この文の意味するところは、Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 127, n. 2 で言及しているように、アブル・ファズル一家の先祖がかつてはタッタ地方に住んでいたことを受けたものであると考えられる。

ような美質を備えた表現 (fiqrāt) は、余人に試み難いものである<sup>56)</sup>。

以上のような見方の証拠となるものは、アクバル時代史の見事な叙述である。その表現の大部分はペルシア語の語彙を用いたものであったので、それを確かなものとするために、アブル・ファズルはニザーミー（12世紀のペルシア詩人）の五大叙事詩集の語彙を用いて散文を作り、自作を見事に完成させた。このようにして、アブル・ファズルは主君を称揚するため、序文以下の記述において、子細漏らさぬ陳述を炯眼 (im'ān-i nazr) をもって果さずにはおこななかったのである。

## おわりに

シャー・ナワーズ・ハーンがその息子アブドゥル・ハッイの協力をえて後世のために書き残した大作の人物評伝集『マアーシルル・ウマラー』（貴顕功業録）には、ムガル朝時代各界で活躍した著名人たちの評伝が数多く収められている。この小論では、そうした著名人のなかでもひとときわ超然と屹立した人物であったアブル・ファズルを取り上げて、その評伝部分を全訳して紹介した。

アクバル時代、アブル・ファズルは皇族以外の民間人としては最高の官位であった五千位に叙任され、政治的、軍事的に傑出した役割を果たした。そのことは、本稿のなかでかなり詳しく述べられている通りである。しかしながらアブル・ファズルは、圧倒的な知的力量を備えた学者であり思想家であるところにその本領があった。ここに紹介した彼の人物評伝中でもそのことに触れられていないわけではないが、時代的制約のなかで穏当なバランスを崩すまいとする著者シャー・ナワーズ・ハーンの姿勢が、アブル・ファズルの本領を活写するための筆致を鈍らせているのは残念なことである。

アクバル時代は、16世紀初ごろ以来インド内外に胚胎し顕現しつつあった近世的な時代的特徴が一気に表面化してくる時代であった。アブル・ファズルはそういう時代の潮流を鋭敏に察知し、自らこれを体現化しようと努めた。彼が恵まれた知性と強靱な意志とによって展開した知的営為の結果が、巨冊の『アクバル・ナーマ』と『アクバル会典』の二大作品であった。この二つの著作が示すように、彼は何よりもまず歴史家であった。インドの近世的歴史家であった。しかし彼の縦横にわたる活動を快く思わぬ勢力によって、彼は51歳のとき謀殺の悲劇に遭遇してしまうこととなる。

56) ベヴァリッジは、以上のような記述内容がアミン・アフマドラージー (Amin Ahmadrāzi) の『ハフト・イクリーム』(Haft Iqlim 七気候帯) 中のアブル・ファズルに関する記述箇所にとったものであるとしている。またこの箇所はアーザードの *Darbār-e Akbari*: 494 でも引かれている旨指摘している [Beveridge & Prashad (trs.) 1941-1964: I, 128, n. 2]。今双方のペルシア語文を対照してみると、両者が正確に重なり合うところは多くない。これは、アーザードが『ハフト・イクリーム』の当該箇所の趣意を自分流のペルシア語に改め直して述べているからである、と考えられる。

このような見方でアブル・ファズルをインド史上に位置づけて理解しようとする者にとっては、本稿で紹介した『マアーシルル・ウマラー』中のアブル・ファズル評伝には不満が残るかもしれない。しかしながら、ムガル帝国の崩壊が急激に進み、各地に地方政権が分立していく18世紀後半期に成った人物評伝としては、止むをえぬところがあった。先に紹介した『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』中のアブル・ファズル伝と並んで、ここに紹介したアブル・ファズル評伝は、彼の多面にわたる諸事蹟を手堅く紹介したものであり、彼の人物像を豊富化していくうえで重要な素材を提供するものである、というべきであろう。

### 参考文献

- Ma'āsir al-Umarā'* of Shāh Nawāz Khān and 'Abdul Hayy, ed. by 'Abdur Raḥīm and Mirzā Ashraf 'Alī, 3 vols., Calcutta, 1888-1896.
- Ā'in-i Akbarī* of Shaikh Abu'l-Fazl, ed. by H. Blochmann, 2 vols., Calcutta, 1872, 1877, reprint, Osnabrück, 1985.
- Zakhīrat al-Khawānīn* of Shaikh Farīd Bhakkārī, ed. by Syed Moinul Haq, 3 vols., Karachi, 1961-1974.
- Darbār-e Akbarī* of Muḥammad Ḥusain Āzād, ed. by Saiyid Mumtāz 'Alī, Lahore, 1898, reprint Lahore, 1988.
- Beale, Thomas William (1894) *An Oriental Biographical Dictionary*, Revised and enlarged by H. G. Keene, London, reprint, Lahore, n. d.
- Beveridge, H. & Bains Prashad (trs.) (1941-1964) *The Ma'āthir-ul-Umarā', Being Biographies of the Muhammadan and Hindu Officers of the Timurid Sovereigns of India from 1500 to About 1780 A. D.*, 3 vols., Calcutta, reprint, Patna, 1979.
- Blochmann, H. & H. S. Jarrett (trs.) (1873-1894) *The Ain i Akbari by Abul Fazl 'Allami*, 3 vols., Calcutta, reprint, Osnabrück, 1983.
- Desai, Ziyauddin A. (tr.) (1993-2003) *The Dhakhīrat ul-Khawānīn of Shaikh Farīd Bhakkārī*, Vol. 1, Delhi, Vol. 2, New Delhi.
- Habib, Irfan (1982) *An Atlas of the Mughal Empire : Political and economic maps with detailed notes, bibliography and index*, Delhi.
- Habib, Irfan (1999) *The Agrarian System of Mughal India 1556-1707*, 2nd revised edition, New Delhi.
- Kondo, Osamu (2012) *The Early Modern Monarchism in Mughal India, With a Bibliographical Survey*, Kyoto.
- Marshall, D.N. (1967) *Mughals in India : A bibliographical survey of manuscripts*, London, reprint, London and New York, 1985.
- Platts, John T. (1884) *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī, and English*, Oxford, 5th impression, Oxford, 1960.

- Steingass, F. (1892) *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, London, 4th impression, London, 1957.
- Zenker, Julius Theodor (1866, 1876) *Türkisch-Arabisch-Persisches Handwörterbuch*, 2 Bde, Leipzig, reprint, Hildesheim, 1967.
- 近藤 治 (2003) 『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会.
- 近藤 治 (2009A) シャイフ・ファリド・バッカリーのアブル・ファズル伝について『西南アジア研究』70, 97-110.
- 近藤 治 (2009B) アーザードのアブル・ファズル伝について『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』5, 1-15.
- 近藤 治 (2010) アーザードのアブル・ファズル伝について (承前)『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』6, 1-30.
- 近藤 治 (2011) アーザードのアブル・ファズル伝について (三)『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』7, 1-62.
- 近藤 治 (2012) アーザードのアブル・ファズル伝について (四)『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』8, 1-10.
- 真下裕之・二宮文子・和田郁子訳注 (2013) アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (1)『神戸大学文学部紀要』40, 69-118.

(追手門学院大学)